

難波西鶴と

海の道

【39】

森田 雅也

大阪の人々を描いた、西鶴の『日本永代蔵』(元禄元(1688)年刊)巻二の二「怪我の冬神鳥」の話です。

この章ではまず、誤診から仕事がなくなくなり、往診に行く、ふりをし、実際は1日中、神社の給馬を見て過ごし、帰宅するだけの医者、が、「給馬医者」とあだ名をつけられてしまった話をあげています。

本来、この人もそれなりの医者としてもうかっていた。ある意味、栄枯盛衰がもし

れませんが、世間に仕事があるように見せかけていた姿は、フランスのアルフォンス・ドーアの短編集『風車小屋だより』に収められた「コルニーユ親方の秘密」を想起させます。南仏のプロバンス地方は豊かに小麦が実る地帯。その脱穀には風車を使っていたのですが、産業革命はこんな

「一度は栄えし者」の共通点

所までも機械化を推し進め、風車小屋は無用のものとなりつつありました。にもかかわらず、脱穀業のコルニーユ親方は以前と変わらず、風車小屋に小麦袋を持ち込みます。誰が効率の悪い風車小屋での脱穀を依頼しているのだろうと村の人は不審に思っていました。案の定、誰からの依頼もなく、ある日、親方の小麦袋の中身が白壁を砕いたもので、とっくに親方の仕事はなくなっていたことがわかります。

この短編集には、オペラで有名な「アルルの女」などが含まれます。プロバンス地方の明るい風土とは対照的に物悲しさが情趣として漂いますが、ドーアの文体はユーモアに富み、西鶴の「給馬医者」と「コルニーユ親方」の描き方は酷似しています。

昔の上品な姿はみずぼらしく変わり果て、「貧乏神の神主にでもなれ」と親せき一同に見限られますが、母親だけは自分の隠居金としてみらっていた10貫目を与えようとしてます。

しかし、商才のない仁兵衛では1年で使い切ってしまうだろうと、姉婿に預け、毎月80目(約18万円)を利息として仁兵衛に渡すように計られています。仁兵衛一家は5人です。うまく切り盛りすれば生活できるところ、なせか極貧生活。どこまでもお金の使い方が下手な人ですね。(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

「絵馬医者」と「コルニーユ親方」